

改善したリテラチャー・サークルによる読書指導の実践

—小学3年生の場合—

広島大学大学院（広島大学附属三原小学校） 細 恵子

キーワード：リテラチャー・サークル、読書日記

1、はじめに

現在、筆者は3学年を担当している。この学年では昨年度5学年で行ったリテラチャー・サークルをそのまま行うことは不可能であるが、そのよさを取り入れながら改善していけば今までとは違った3年生の主体的な読書会を経験させることが可能であると考え。また、読書日記を並行していくことで、日常的な読書生活指導をしていき、児童の読書力を育てていくことができると考える。

本稿では、3年生の児童のノートや読書会の発言、読書日記、本の紹介カードからどのような読み方ができるようになってきたかについて考察することがねらいである。

2、単元について

- (1) 単元名 いろいろな読み方で読み、感想を伝え合おう『あらしの夜に』他
- (2) 実施月 6～9月
- (3) 学年 第3学年 38名
- (4) 指導計画

第一次 これまでの自分たちの読み方を確かめ合い、単元の見通しをもつ。

第二次 『あらしの夜に』（学校図書3年）を読む。

- ・読み方を選んで読み、感想を書く。
- ・グループで感想を交流する。
- ・学級で感想を交流する。（読書会パートI）

第三次 自分が読みたい本（同じテーマの本、同じ作者の本）を選び、読み方を選んで読む。

- ・同じ本を読んだ者同士でグループを作る。（第1～第3希望の中で1グループ3人ぐらいにする。）
- ・自分の感想を読書日記に書く。（1週間）
- ・グループでいろいろな読み方を交流する。（読書会パートII）
- ・学級活動の時間も利用する。
- ・グループの読書会後の自分の感想を全体に話す。

第四次 推薦図書等を参考にして読書をし、自分のおすすめの本を選び、本の紹介カードを書く。（夏休み）

・紹介カードの書き方を学習する。

・紹介カードを書き、展示し合う。

日常 友だちの紹介カードを見て興味をもった本を読み、紹介してくれた友だちに返事を書く。

(5) 学習指導の改善

今年度は、勤務校が変わり、また、学習者の学年も変わった。学習者の実態が昨年度とは変わっている。そのことをふまえ、また昨年度の実践の成果と課題をふまえて、以下のような改善を行った。

① アメリカのリテラチャー・サークルでは、いくつかの読み方（自分とのつながりを見つける、疑問を見つける、優れた表現などに光を当てる、目に浮かんだ情景などを絵・図にする等）を決めている。そこで昨年度、筆者は、国語科教材の内容に合わせて、作品の特徴に注目する作品スポット係、人物の性格や考えの変容等をとらえる人物スポット係、分からないことを出す質問係という役割を決めて読ませた。その結果、読み方を習得することができた児童は多かったが、自分が読みたい読み方で読めなかったり意欲をもって読めなかったりすることもあった。

これまでは、教師が指導のねらいにそっていくつかの読み方を指定することが多かったが、今回は、児童が読む意欲をもち、主体的に読むことができるようにするために、児童の実態からスタートすることにした。二日に一度書いているみんなの読書日記から多様な読み方を紹介し、児童がいろいろな読み方に挑戦してみようという気持ちをもつことができるようにする。

個人で読書をするときは、大村（1984）が「いろいろな読み方を使いこなす」の実践等において「いろいろな読み方」のてびきを作成して渡したように、筆者も児童の実態に即して「読み方のてびき」（資料1）を作成して渡し、児童が本の内容に応じて自分の読み方を自由に選ぶことができるようにする。大村（1994）が「めいめいが、自分に合った、ちょうどできることをやって、それ

が成功して楽しい、自分が成長していく実感があってこそ、いきいきしてきます。そのために教師の手伝いとして手びきがついているのです。」「人の話を聞いたり本を読んだりした心の中にはいろいろなものがありますけれども、それを拾い上げることがむずかしい、いろいろ思っているのだけれども、さて何と言ったらいいかわからない、といったようなふうになっています。手びきはそれを拾い上げる鍵のようなものですから、正解といったようなことはないのです。しなければならないことや、考えなければならないことがあった時にそれができるように心を耕す手びきなのです。」と述べているように、筆者も一人ひとりの児童にしっかりと感想や考えをもたせたり感想や考えを広げたりして、できた実感をもつことができるようにするための手掛かりとしててびきを使用する。しかし、決してそのてびきにしばられないようにし、それ以外の読み方をしてもよいことを伝えておく。以上のような手立てをとることで以前より、読まされるのではなく自分で読もうとする気持ちが強くなると考える。

読み方のでびき

- ① 音読したいところは・・・
- ② はらはら、どきどきしたところは・・・
- ③ ほっとしたところは・・・
- ④ おもしろいところは・・・
- ⑤ すきなところは・・・
- ⑥ やぎ、おおかみのことをどう思うかという
と
- ⑦ やぎとおおかみをくらべると・・・
- ⑧ 自分とやぎ（おおかみ）のたところは
ちがうところは・・・
- ⑨ この話を読んで思い出したことは・・・
- ⑩ この話を読んでいくうちに考えがかわった
ことは・・・
- ⑪ 自分がおおかみだったら、やぎのどんな言
葉や行動がうれしいかというと・・・
自分がやぎだったら、おおかみのどんな言
葉や行動がうれしいかというと・・・
- ⑫ この後の話はどうなるかというと・・・
- ⑬ その他

資料1 読み方のでびき

② 3年生においても昨年と同様、アメリカのリテラチャー・サークルで重視されている「個人的なつながりをつくる」ことを取り入れ、自分と関係づけて読み、自分のあり方を考えられるようにし

ていく。難波他（2007）は、「中学年は、中心をとらえ、対象化体験を起こしたい段階」と述べている。登場人物の行動や思いを自分のそれらと比べるとという対象化体験は確かに中学年で大切にしていきたいことであるが、現在の3年生の児童の中には対象化体験と共に、典型化体験（文学を体験した自分と現実の自分との対話から葛藤が起こるという体験 難波他 2007による）が少しできている児童もいる。また、本年度から勤務校では、研究開発により新領域「希望（のぞみ）」において、自己の向上を図る児童を育てることをめざし、一人ひとりの児童が「なりたい自分」をえがくことができるように指導を進めているので、国語科においても、3年生なりに自分を見つめる典型化体験が少しずつできるようにしていきたい。

③ Day, J.P. et al. (2002)は「リテラチャー・サークルの究極的な目標は、自由で自立した、生涯にわたる読者を生み出すことにある。そうしたことが児童たちに起こるようにするためには、彼らが自分で本を選び始めるようにしなければならない。」と述べ、自分にぴったりの本を独力で選ぶ力を発達させるために、やさしい本から難しい本の順に並べたリストを作るなどのストラテジー・レッスンを紹介している。

吉田（2010）は、アメリカのリーディング・ワークショップの特徴の一つに「子ども一人ひとりが自分で読むものを選ぶ。」を挙げている。

筆者も将来の読書につないでいくためには、児童が自分に合った本を選ぶ力をつけることが重要であると考え。しかし、その力はすぐに身につくものではない。まず、教師が児童の実態や内容によって選んだ複数の本を示し、どのような本をどのように選ぶことができるのかを学級全体に指導し、その後、自分で選ばせるようにする。

第三次では、教師が用意した複数の本（同じテーマの本、同じ作者の本）から読みたい本を選ぶようにし、第四次では、推薦図書を示したうえで自分の力で選書ができるようにする。

3、授業の実際

○第一次（6月20日）

筆者が『あらしの夜に』の読み聞かせをした後、内容を理解するためにアメリカのリーディング・ワ

ークショップで行われているように、二人組でどんな話なのかを再話して確かめ合った。いろいろな読み方で読むことができるためにはまずあらすじを理解しておくことが必要である。ここでは登場人物の二人がどのような状況の中で出会い、どのようになっていったかなど、おおまかな内容を読み取っていた。

次に、筆者がこれまでの友だちの読書日記を読んで紹介し、児童は友だちがどんな読み方をしているのかを考え、多様な読み方を確認し合った。そして、今回の単元のゴールにはいろいろな読み方で読んでグループで読書会をし、おすすめの本の紹介カードを書くことになった。

○第二次（6月22日～）

友だちのいろいろな読み方と国語科でこれまでに学習した読み方から、筆者はこの単元での読み方を「読み方のてびき」（資料1）として教室に掲示し、児童の国語ファイルにも綴じさせた。読み方のてびきの①④⑤⑥⑦⑧⑩⑫はこれまでの物語教材『つり橋わたれ』『ゆうすげ村の小さな旅館』や4月から書いてきた読書日記でできていた読み方である。②③は、第二次の読み聞かせの時に児童がつぶやいたり表情で示したりしたものである。⑨⑪は、自分と関係づけながら読むことができるようにするために筆者が加えた新たな読み方である。また、4月からいろいろな読み方について教室に掲示していたものもてびきと共に使ってもよいことにした。

まず、児童は自分の好きな読み方で『あらしの夜に』を読みながら、1枚の付箋紙に一つの感想を書き、本にはっていった。この方法は今後、特に、調べるための読書をするうえで役立つ方法であるとともに、多くの感想を整理しやすくするものと考えた。その後、グループでの感想交流の仕方を一つのグループで実際に行いながら学び合った。交流は以下のように行った。

- ・一人が1枚の付箋を机に出しながら、教科書のページを示し、読み方、感想を話す。
- ・他の児童が、同じところで似た考え（同じ読み方、違う読み方）や同じ読み方をしたところについて話し、付箋を重ねたり並べたりする。
- ・他の児童が違う読み方について話し、付箋を並べる。

このようにグループの交流の場では一人ひとりが

自分の読み方と感想を述べ、同じ読み方や異なる読み方を確かめ合った。

次は、学級の読書会パートIである。ここでは、グループでの感想交流をもとに自分の感想を全体に出していった。この学級での読書会パートIは、第三次のグループの読書会パートIIが自分たちでできるようにするための練習の場ともなった。ここでは、みんなで読み方と話し合いの仕方を確かめ合った。

次は学級の読書会パートIで出た感想の一部である。

- ・ 81ページのところで、「草」「肉」といったところが一番どきどきしてどうしようと思ってしまいました。②の読み方です。
- ・ 82ページを見てください。3行目で、ピカッと光ったとき、顔が見えるかと思ってはらはらどきどきしました。②です。
- ・ 同じところで、かみなりが光っておおかみに食べられると思いました。でもばれなかったのほっとしました。③の読み方です。
- ・ 似ています。いまずまがなって光ったから顔がうつってしまうからびっくりしました。そのとき、心がびくっとふるえました。②です。
- ・ ほかのところで、私は84ページのところで、「あらしの夜に」という合言葉っていいなと思いました。ここを音読したいです。理由はうきうきするからです。①です。
- ・ 82ページの1行目を見てください。顔が見えないのに友だちになれていたからすごいと思いました。顔がみえないのに友だちになれたからです。
- ・ 84ページの6～7行目を見てください。やぎとおおかみが友だちになるとは思わなかったです。理由は、草食と肉食で、おおかみはやぎのにおいが分かるからです。
- ・ 77ページを見てください。わたしは、やさしいやぎだと思います。やぎはおおかみがくしゃみをしたらいじょうぶと言ってあげてやさしいです。
- ・ 私は、やぎがほっとしたといったので、やぎとおおかみのどちらとにしているかということ、自分はやぎの方がにているんじゃないかなと思いました。④です。
- ・ やぎはやさしいけど、おおかみはこわいと思いました。しゃべり方がそうだと思います。おお

かみはらんぼうだと思えます。⑦です。

- ・ おおかみはへんなしゃべり方をしていると思えます。
- ・ 関西弁みたいでおもしろいです。④です。
- ・ ぼくもおおかみのしゃべり方がおもしろいと思いました。
- ・ ほかのところ、78 ページを見てください。おおかみは、バクバク谷、やぎはサワサワ山だったから、やぎのことは分かったかもしれないからやばいと思いました。サワサワ山はやぎのところだからです。②です。
- ・ 「さいなら、あらしの夜に」のところで、明日あったらどうしようと思いました。ドキドキしました。
- ・ 私は、おいしいものが近くにあるのに、おおかみはやぎだと気づいていないからおもしろいと思いました。

このように、児童はどのページからどの読み方でどのように思ったかについて話していった。

感想の中で多かったのは、はらはらどきどきしたところだった。人物や人物関係に対する思いや好きなどころはあまり出されなかった。おもしろさについては、主に登場人物の話し方に目を向けており、内容についての感想はほとんど出されなかった。しかし、児童は読書日記に内容のおもしろさや好きなどころを書いており、筆者は全体で読みを深めたかったので、次の時間はそれらを中心に話し合うことにした。次は話し合いの一部である。

- ・ すぐに二人が友だちになっているところが好きです。
- ・ 76 ページのところで、お互いにきづいていないところがおもしろいです。
- ・ ぼくも同じで、相手のことにきづいていなくておもしろいです。
- ・ 81 ページからおもしろかったところは、おおかみのしゃべり方です。
- ・ 80 ページのところの二人の会話がおもしろいです。
- ・ 76 ページを見てください。楽しそうに会話しています。
- ・ 私がすきなところは76 ページのやぎが「あなたがきてくれてほっとしましたよ。」と言ったところ

ろです。

- ・ 76 ページで、おおかみがやぎのことを気付いていなくて、やぎもおおかみだと気づいていないところがおもしろいです。
- ・ 「だいじょうぶですか。」が好きです。やさしいやぎだからです。
- ・ やぎは「草」と言っていて、おおかみは「肉」と言っていてかみなりがなったからおもしろかったです。
- ・ ぼくも同じで、かみなりがなってばれなかったところがおもしろかったです。
- ・ 82 ページを見てください。いなずまが光ったけど、顔がみえなかったところがおもしろかったです。
- ・ そして、かみなりがなって体をよせあうところがおもしろかったです。
- ・ 84 ページのところで、すきなところは「あらしの夜に」という合言葉を作ったところです。理由はおおかみとやぎが仲良くなって心がほっこりするおはなしだなあと思ったからです。
- ・ 84 ページのところで、「あらしの夜に」です。理由は題名が最後に出てくるからです。
- ・ 好きなところは最後で、理由は、私は自然が好きで、自然のことばが入っているからです。
- ・ 82 ページを見てください。おおかみがまぶしくて思わず目をつぶってしまったところがおもしろかったです。安心しました。

このように、一つのことについての意見の深まりはないが、児童はいろいろな感想を出した。筆者は、ここまでに述べたおもしろさについての感想を「登場人物の会話のおもしろさ」「偶然のおもしろさ」「お互いが気付かないおもしろさ」とまとめ、さらに他のおもしろさはないかと発問したが、児童からの発言はなかった。出来事や会話から思い込んでいるおもしろさに気付くこともこの物語の楽しさなので、児童が自力で読み取れないことについてはワークシートに書くという学習を取り入れた。児童に任せるだけではなく、必要なときはきちんと教えるところも入れたいと考えた。このワークシートに書く学習では、多くの児童は教科書で確かめながら慎重に考えていた。「速く走れないと生き残れない」というそれぞれの母親の言葉の意味については理解することができにくい児童が数人いたが、全体で思い込みの場面を確認すると、それぞれの意味に気付いてい

った。

次に、自分と関係づけながら友だち関係について考えるために、資料1の⑩の読み方で読む学習（自分が登場人物になったつもりで、相手のどんな言葉がうれしいのかを考えること）も取り入れ、感想交流した。

そのあとも、希望（のぞみ）との関連でなりたい自分を考えるために、仲良くなるために大事なことは何かを考え、ノートに書いた。書く際には、できるだけ具体的なことが書けるように筆者は「○○が・・・したように・・・する。」という形を示した。

児童の反応は以下の通りである。

- ・やぎが「すごいあらしですね。」と話したように自分から友だちになろうと相手にせつすること。
- ・おおかみみたいに相手の言葉にはんのうする。
- ・おおかみが元気よく話したように元気よく話すこと。
- ・おおかみとやぎのように相手が話したことをうけとめる。
- ・おおかみとやぎのようにいいぐあいに話をかえていく。
- ・はじめにやぎが声をかけているから自分から声をかけるのをがんばりたいです。
- ・やぎが「そりゃあたいへん・・・」といったようにやさしく声をかけてあげること。
- ・やぎが「だいじょうぶですか。」と言ったように相手を気にしてあげる。
- ・やぎが心ばいしてくれたように心ばいすること。
- ・やぎが「こっちに足をのぼしてくださいよ。」と言ったように、けがをしている人がいたら自分の場所をゆずる。
- ・おおかみがやぎに「まるでやぎみたいにかん高いわらい声ですね」というようなしつれいなことを言わないようにする。
- ・やぎが「あしたのお昼なんてどうです。」といったように相手をさそうこと。

この学習においては、どの児童も考えることが容易で、「自分から話しかける」「相手との会話を続ける」「やさしく話す・元気よく話す」「相手を気遣って行動したり話したりする」ことに関しての意見が多かった。このように動物同士の関係から自分のあり方を考えることができた。

第三次（7月1日～）

筆者が用意した本（『あらしの夜に』のシリーズや友だちのことを考えられる本）から自分の読みたい本を選び、グループを作った。

ここでは教師が本を指定するのではなく、複数の推薦したものから選択できるようにした。

作ったグループは13であった。グループが読んだ本は『あるはれたひに』『きりのなかで』『くものきれまに』『どしゃぶりのひに』『まんげつによるに』『しろいやみのはてで』『ふぶきのあした』『ふたりはともだち』『ふたりはいつも』『ふたりはいっしょ』『ふたりはきょうも』『わすれないおくりもの』『とべないほたる』であった。一つのグループの人数は、意見を多く出しやすいように、また人の意見と自分の意見を比べやすいように3人ぐらいにした。

本を読む期間は1週間以上とり、その間、家庭で読書日記に感想を書くようにした。

次は『とべないほたる』を読んだグループ(3人)の読書会パートⅡの記録の一部である。

読書会Ⅱ（1回目）の様子

(A児) 26 ページを見てください。⑤の読み方で読みました。とべないほたるやほかのほたるたちが、とらえられたほたるのむかえのじゅんぴをいっしょうけんめいしているところが私のすきな所です。助けてくれたおかえしをしてもっといろいろなほたると仲良くしようとしているのかなあと思ったからです。

(B児) 同じ⑤の読み方であります。10 ページを見てください。ほたるたちがとべないほたるとぶアドバイスをしていて、人を助けている感じだからそこが好きです。心がつうじてきます。

同じ読み方で、5 ページを見てください。みんながとべてよかったなと思いました。わたしはそこで、題の「とべないほたる」はなんなんだろうと思いました。

(A児) 5 ページにとべたとかいてあるけど、いっぴきだけはとべないから題は重要だと思います。どこが好きですか。

(B児) みんながとべたところが好きです。

(A児) 18 ページを見てください。とべないほたる

はとべないからにげることができません。だから、かわりにほかのほたるがとべないほたるがつかまらないようにみがわりになったところが私のすきなところ。読み方の⑤です。理由は、友だちを守ろうとしているからです。

12 ページを見てください。とべないほたるは自分の羽がちぢれてとべないからだんだんはずかしくなってからだを石にぶつけたところをみていたほたるたちがちょっとずついなくなつて、ひとりぼっちになったところがかわいそうでした。

(C児) わたしは、一人ぼっちにならないように来てと自分からよべばいいのになあとと思います。

(B児) さっきの話を聞いて、わからなかったところがありました。Aさんの好きなおところはなかまのやさしさというところですか。

(A児) 友だちを守っているところが好きです。

(C児) 26 ページを見てください。とべないほたるはとべないのにいっしょうけんめいやっていてやさしい心をもっていると思いました。

(A児) 理由は？

(B児) 理由って説明に入っていると思います。

(A児) なぜそうしたかという理由が大切だと思います。

(B児) 24、25 ページを見てください。わたしはほたるがりの子どもたちがひろちゃんにほたるを見せて喜ばせようとしたと思います。

(A児) そのページでは、ひろちゃんの話は関係があるのかな。

(B児) ……

Aさんににているんだけど、わたしももしそういう場面にでくわしたらほたるといっしょのようにまわりのものに体をぶつけます。

(A児) そういう場面とはどんな場面ですか。

(B児) そういう場面とは・・・飛べないところです。

(A児) わかりました。

次を言います。31 ページを見てください。「ひとりぼっちじゃないってなんてすきなことだろう」という言葉がいんしょうに残りました。理由は心強くて安心するからです。

(C児) 同じページであります。友だちがいっぱいできてよかったねと思いました。

(A児) 友だちがいっぱいできてというのは、仲良くできたということですか。

(C児) はい。さいしょは友だちがいなかったのに、できたからほっとしました。

(B児) わたしは、「ひとりぼっちじゃないってなんてすきなことだろう」のところで、とべないほたるが仲間たちと仲良くなって友だちがふえたのでよかったと思いました。ここで、ようちえんの時、それまでぜんぜん友だちができなかったとき、はじめてできたとき、私も一人ぼっちじゃないのはすきだと思いました。

この話し合いでは、物語の中の好きなおところからスタートし、途中、題について質問が出たが、深まらなかった。次にかわいそうなおところから、人物に対する自分の思いが出て、とべないほたるのやさしさ、友だちができたこと、自分が幼稚園の時のことへと話が進んでいった。

A児は、自分の考えを堂々とすらすらと述べる子どもであり、話し合いがずれていくときには修正しようとしていたが、まだ十分に話し合いを進めることはできなかった。B児は、読書ノートにいつも意欲的に自分の感性豊かな感想を書いていたが、話し合いの時にはそれらの感想をうまく引き出すことができなかった。C児は、読書日記にいろいろな感想を書いていたが、A児やB児に比べて発言が少なかった。

この1回目の話し合いの後、グループで次にどんなことをどのように話し合いたいかを決め、次の話し合いまでに準備をしておくことにした。

このグループでは2回目に、「音読したいところ」「この話の続き」について話し合うことになった。2回目の話し合いは以下の通りである。

(A児) これから音読したいところを話し合います。

8 ページを見てください。「どうしたの？」と心配した言葉を音読したいです。

(C児) 私もここが感動したので音読したいです。

(A児) 23 ページを見てください。わたしは、なかまのほたるが助けようとしたというところと

飛べないほたるがなみだをこぼすところが感動しました。そこを読みたいです。

(B児) 12 ページを見てください。とべないほたるがあたりをメチャメチャにあるき、くやしくて石に体をぶつけるところ、そこが気になるから音読したいです。

22 ページ、23 ページのところも「あのほたるはぼくのかわりにつかまってくれたんだ。」と気付くので音読したいです。

(A児) 次はこの話の続きについて話し合います。

(C児) 一人ぼっちじゃないってなんてすてきなことなんだろう」で終わっているからとべないほたるはほかのほたと仲良くなるんだと思います。

(B児) 身代わりになって助けてくれた友だちと仲良くなると思います。

19 ページを見てください。手にほたるがとまって、なぜとまったのか、みがわりかなと思いました。

(A児) 質問があります。みがわりになってあとから帰ってきたからこの話のつづきを考えるんじゃないですか。

(B児)

(C児) 23 ページのところで、「ぼくがでていこうとおもったんだ。」「わたしもよ。わたしもでていこうとおもっていたのよ。」と言ったから、みんなこれからとべないほたるのことを気にすると思います。

B児は、話の流れに乗れないときがあり、ずれた発言をしていた。では、話し合いでうまく自分の感想を友だちの発言につないでいくことができないB児は読書日記にどのような書いていたのか見てみる。

B児の読書日記

<7月2日>

ほたるが「ひとりぼっちじゃないってなんてすてきなことだろう」と言いました。この本はとってもいい本でした。つぎはもっとくわしく読んでいきたいです。

<7月4日>

この本は、人間といっしょだと思えました。人間は目が見えない人もいます。だからいっしょだと思えました。だからわたしもそういう人にやさしくし

たいです。

<7月7日>

この本は友だちのいない人の気持ちを考えられる本です。わたしは友だちがたくさんいるから考えたこともありませんでした。とべないほたるはほかのほたるとはなかまはずれだからともだちがいないと思います。そのとき飛べないほたるはとってもさびしくてかなしいと思います。でも最後には友だちができていたのでよかったです。

<7月10日>

わたしのこの本の好きなところは14 ページの後ろから1、2行目です。理由はどのほたるたちもとべないほたるのことを考えていたからです。わたしはやさしいなと思えました。このことをとべないほたるが知ったら仲間たちのやさしさをたっぷり感じると思います。そして、やる気がでると思います。だから私も友だちを大切に、困っているときは助けてあげたいです。

この児童が使った読み方は、次の通りである。

7月2日・好きな言葉から本の評価をする。

7月4日・人間に置き換えて自分のあり方を考える。

7月7日・人間の気持ちを考え、共感する。

7月10日・好きな所からやさしさを感じ、自分がしたいことを考える。

では、読書会を終えて書いた複数の児童のノートを紹介する。

グループの読書会Ⅱ（1回目）をして

- ・ みんなで話し合うといろいろな意見が出て、いろいろな考え方が分かりました。だから、いろいろな話し合いに使えると思います。とべないほたるはやさしさなどを知る本なのでおもしろいと思うところはあまりありませんでした。でも、みんなで出し合えば、たくさん出ました。わたしは〇〇さんの意見を聞いて、〇〇さんは感じる心がゆたかだと思いました。次に話しあいたいことは、それぞれのはっぴょうしたことについて、しつもんをたくさん出すことです。
- ・ ぼくは、〇〇さんの意見を聞いて〇〇さんは本の人物の気持ちを考えていると思えました。
- ・ この話を読んで、私はかわいそうな話だなあと

思いました。〇〇さんがいろんな意見を出して
いてすごいなあと思いました。友だちと話し合っ
て私はとても楽しかったです。〇〇さんと〇〇さん
はいっぱい意見を出しました。はじめてだったの
であまり上手にできなかったけど楽しくできたの
でよかったです。

- ・ 今日わかったことは読書会は友だちと話し合
うことで自分の意見が広がるんだなあというこ
とです。

グループの読書会Ⅱ（2回目）をして

- ・ 〇〇さんと同じでした。〇〇さんは、この話を
読んでいろいろなはらはらどきどきがあると言
っていました。〇〇さんもいっしょで、ガブはギロ
とバリーをうらぎっていてそれでもメイが友だち
だから助けていたのでとてもやさしいと言ってい
ました。わたしも同じ考えで、この「きりのなか
で」のグループはとても仲がいいと思いました。
読書会はとても楽しくてみんなと話せるようにつ
くったんだと思いました。

- ・ この話で、とべないほたるがどれだけかわいそ
うかということが分かりました。そして、かんど
うするところがたくさんありました。〇〇さんの
発表が分かりやすかったです。

友だちと話し合うといろいろなことが分かりま
した。〇〇さんや〇〇さんもいっしょうけんめい
発表し聞いてくれたのでうれしかったです。しつ
問もたくさん出せて前の目ひょうもたっせいでき
てよかったです。またこんど話し合いをするとき
はほかのメンバーでもうまく話し合いができるよ
うにがんばります。

- ・ この本は友じょうを教えてくださいました。大きく
すると友だちのかんけいを深く教えてくださいまし
た。わたしは、この本を読めてうれしかったです。
なぜなら大切なことを感じさせてくれたと思うか
らです。お友だちの文を聞いてこの人はこんな考
え方をするんだと思いました。
- ・ 〇〇さんがぼくの言ったことをつなげていっ
てくれたのでよかったです。話し合っているうち
にいろいろな考えがあることが分かりました。そ
して、人の考えにも自分の考えにも良いところが
あるんだなと思いました。さらにグループで話し
合うといいことが出てまちがっていたら注意して
くれるんだなと思いました。

- ・ この話で私は感動したんだけど、〇〇さんと同
じでかわいそうや感動したというのが同じでし
た。同じ思いをしてくれている人がいてよかつた
です。〇〇さんも私がいったことを聞いてうなず
いてくれていました。

グループでいろんなことを話しました。はじめ
て読書会をしたんだけど、みんなといろんなこと
を話せてよかったです。

以上のように、児童は読書会を「いろいろな意見
を知ることができる。」「人の考えのよさを知る。」「
楽しく話し合う。」「自分の意見が広がる。」「友
だち関係ができる。」ととらえていた。

第四次（7月中旬～9月中旬）

筆者は、夏休み前に推薦図書（友だち関係につい
て書かれた本等）を示しながら図書館や本屋で本を
探して読むことや、単元の学習で学んだことを生か
して紹介カードを書くことについて話した。そして、
児童は、夏休み中にいろいろな本を読み、読書日記
を書き続け、9月にはその中から1冊選んで紹介カ
ードを書いた。

次は児童が書いた紹介カードの文章である。

【A児】

『れいぞうこの夏休み』 村上しいこ

家にあるれいぞうこがこわれてしまいました。す
ると、れいぞうこがしゃべりはじめて「夏休みがほ
しい。」と言いました。家族でれいぞうこをプ
ールにつれていき、楽しい夏の思い出をつくりまし
た。

おもしろかったところは、れいぞうこに顔や手足、
しっぽがあつてとつぜんしゃべりだしたところと家
族のやり取りです。れいぞうこが生きているかのよ
うに話が進んでいき、れいぞうこをおいている家の
人たちもとまどうことなく話はずんでいるところ
がとてもおもしろかったです。

きつとふだんしゃべれなくて動けないれいぞうこ
さんはこしょうしたように見せかけて家族の人に自
分の気持ちを分かってもらいたかったんだと思いま
す。とても上手な方法だなあと感心しました。もし、
私もこの家族の一員だったらこの家族のようにれい
ぞうこさんに楽しい思い出をつくらせてあげたいと思
います。

【D児】

『まほうのにわのピアノレッスン』 あんびるやすこ

りょう親とはなれてくらすジャレットは大切な曲をひくために、すてきなピアノを買います。そして、ひみつのレッスンはじまります。

私は6びきの子ねこたちが大好きです。理由は二つあります。一つ目の理由は一生けんめい仕事の手伝いをするすがたがとてもかわいいからです。二つ目の理由は、りょう親とはなれてくらすジャレットの気持ちをいやしてくれているからです。たとえば、ジャレットが一人ぼっちの時、なぐさめているところ。私はそんな6びきの子ねこたちが大好きです。

私にしていると思うのはアンという子ねこです。なぜなら、はじめてのことにチャレンジするけど、おっちょこちょいでしっばいしてしまうからです。それはよく考えずに行動してしまうからです。私もはじめてやる時におっちょこちょいでしっばいしてしまいます。そんなところが私にしていると思ったからです。次からあわてずに行動してしっばいしないようにしたいです。

【E児】

『エルマーのぼうけん』 ルース・スタイルスガネット

エルマーとねこは、家の近所の町角で出会いました。エルマーはねこにたびの話聞き、りゅうに会いに動物島へとむかいました。そのと中にトラやサイがわるいことをするけれどうまくかわしていききました。

ぼくはエルマーがすきです。雨でびしょぬれだったねこを家の中に入れてめんどろをみてあげたからです。ぼくはエルマーのことをやさしいなと思いました。

エルマーはいのちがけで動物島へ行きました。だからゆうきがあるなと思いました。でも、ぼくはエルマーみたいにゆうきがありません。一人ではむりだと思えます。なぜならぼくはこわがりだからです。

感動したところはエルマーがりゅうを助けたところです。なぜなら動物島へ行ったたんけんかはんみんな生き残らず帰ってこなかったのにエルマーは帰ることができたからです。

【F児】

『いのちのいろえんぴつ』 こやま峰子

かすみさんは、十才の時にのうしゅようという病気になるました。それでもかすみさんは詩と絵をかき続けました。

かすみさんの車いすをおしてくれるまゆさんという友だちがいます。かすみさんは、自分の車いすをおしてもらっているからまゆさんが遊べないのがつらかったみたいです。そのかすみさんのやさしい心がわたしは好きです。まゆさんもかすみさんの役に立てるのがうれしいと言います。二人ともおたがいを思い合っていてすごいと思いました。わたしもそういう友だちをつくりたいです。

かすみさんはだんだん病気がすすんで字も書きにくいのに、詩を書き続けたのですすごいと思いました。私だったら詩を書き続けられないと思います。なぜそう思ったかは、字も書きづらいししんどいと思うからです。かすみさんにとって詩と絵は大切なのだと思いました。どこからそう思ったかという、「先生が詩を見てないからがんばって書く。」と書いてあったからです。

A児は、「おもしろかった」「人物の気持ちを想像する」「もし、自分が・・・だったらと考える」ことについて書いている。D児は、「好きな人物」「自分と人物を比べて似たところ」「これからの自分」について書いている。E児は、「好きな人物」「人物に対する思い」「自分と人物を比べてちがうところ」「感動したところ」について書いている。F児は、「人物関係について思うこと」「自分だったらと考えること」を書いている。

他の児童も、このように2～3種類の読み方を選んで感想を書いていた。

4、成果と課題

- 単元の導入で友だちの読書日記を読み、互いに読み方を確認し合うことで、児童は以前よりも意欲をもって本を読み始めることができた。
- 児童の実態に即して作成した「読み方のてびき」は、読んで感想をもつことが苦手の児童にとってヒントとなった。実践前は、筆者が指定した読み方（特に解釈）で読めない児童が24%いたが、今回の実践では、全員が本の内容に応じて自分の読みたい読み方（複数の読み方）で読むようになった。

- ・ 第三次で自分が選んだ本を読んだときに「読み方のてびき」の読み方が進んでできた児童をノートや読書日記、紹介カードから分析した結果、感想をもったり評価したりすること（てびきの①～⑥）は100%の児童ができていた。自分との関係づけ（てびきの⑧⑨⑩）は49%の児童ができており、解釈することよりもよくできていた。てびき以外の読み方についても同様の結果であった。第四次では、好きな人物や好きな場面、人物に対する思い等の感想や評価を書いた児童は100%であった。「自分だったら」「自分と人物をくらべる」「自分のあり方」等の自分との関係づけができていた児童は78%であった。

このように、児童は「読み方のてびき」等を参考にして、感想をもったり本の内容や人物を評価したり、自分と関連づけて読んだりすることができるようになってきた。

- ・ 読書会をするためにはまず自分の考えをしっかりとっておくことが必要である。読書日記はそのことに役立った。
- また、話すことや話し合うことが苦手な児童に対して、筆者はその児童の読書日記に書かれた内容から感想を読み取ることができた。発言内容と共に、書いたものから児童の読み方を評価していくことが必要である。
- ・ グループの読書会ではまだ自分たちだけで話し合いをする力が十分育っていないため深まらないことがあった。読書日記に多様な感想を書いても話し合いの流れに乗ることができず十分に発言できない児童もいた。今後、友だちの意見に対して似た意見や異なる意見、質問などをつないでいく力や一つの感想について深めていく話し合いの力を普段の読み方のミニレッスン等で身につけていく必要がある。
- ・ 自分と関係づけて読む時には、まだ具体的な場面での自分あり方を考えることはできていない。
- 今後、読書を通して自分自身を振り返る場、見つめる場を大切にしていきたい。
- ・ 自分に合った本を進んで選ぶことができにくい児童がいる。今後、ミニレッスン等で選書の指導を工夫していく必要がある。
- ・ 一人ひとりがさらに自分の伸びを実感したり次の目標をもったりすることができるようにしていくため、読書指導においてポートフォリオ評価を

取り入れていきたい。

5、おわりに

本稿では、リテラチャー・サークルを改善した読書会による読書指導について述べた。今回行った読書指導では、国語科で単に技術面の読み方を身につけさせるだけではなく、読書日記を並行することで児童理解ができ、個の変容を捉えることもできた。今後、読書指導をしながら生徒指導につないでいくこともできると考えられる。今後、読書指導を改善しながら児童にどのような力がついていくのかを確かめていきたい。

【引用参考文献】

- 足立幸子（2004）「リテラチャー・サークル」『山形大学教育実践研究』13
- 足立幸子（2008）「読書の魅力を伝える技法」『教育と医学』56（1）
- 足立幸子（2009）「読んで、書いて、話し合う読書の時間」『学校図書館』37
- 大村はま（1984）『大村はま国語教室7 読書生活指導の実際（一）』筑摩書房
- 大村はま（1984）『大村はま国語教室8 読書生活指導の実際（二）』筑摩書房
- 大村はま（1994）『教室をいきいきと2』ちくま学芸文庫
- 難波博孝・三原小学校（2007）『文学体験と対話による国語科授業づくり』明治図書
- 細恵子（2012）「「読むこと」の学習で育てる読書力の考察—アメリカのリテラチャー・サークルのヒントと日本の国語科教科書のてびきの比較を通して—」『国語教育思想研究』第4号、国語教育思想研究会
- 細恵子（2012 刊行予定）「小学校教育における読書活動の支援」難波博孝他編『児童サービス論』学芸図書
- ルーシー・カルキンス、吉田新一郎・小坂敦子訳（2010）『リーディング・ワークショップ「読む」ことが好きになる教え方・学び方』新評論
- Daniels, Harvey (1994) 『Literature Circles: Voice and Choice in the Student-Centered Classroom』Stenhouse Publishers
- Day, J.P. et al. (2002) 『MOVING FORWARD with LITERATURE CIRCLES』New York: Scholastic